

氏名(本籍)	たて いし たく や 立石拓也(山口県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第1845号
学位授与年月日	平成14年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	《ニーベルングの指環》における脱民族主義的解釈の批判的考察
主査	筑波大学教授 井上修一
副査	筑波大学教授 上田浩二
副査	筑波大学教授 博士(法学) 荒木正純
副査	筑波大学教授 D. L. 川那部保明
副査	筑波大学助教授 相澤啓一

論文の内容の要旨

本論文はリヒャルト・ヴァーグナーの楽劇四部作《ニーベルングの指環》(以下《指環》と略す)のテキスト解釈の歴史と問題点を論じたものである。タイトルにある「批判的考察」とは、批判的な態度、つまり「クリーティッシュ」に考察するという意味で、脱民族主義的解釈を否定的に捉えているわけではない。

よく知られているように、ヴァーグナーの芸術はドイツ第三帝国下で非常に好まれ、作品のゲルマン的属性が強調された。本論文はそのようなヴァーグナー解釈を民族主義的解釈と呼び、逆にゲルマン的属性の強調から意識的な距離を保とうとする戦後のヴァーグナー解釈を脱民族主義的解釈と呼ぶ。

本論文は脱民族主義的解釈を批判的に考察するため、序論の中で2つの仮説を立てている。ひとつは、脱民族主義的な《指環》ひいてはヴァーグナー解釈は、《指環》の中にある民族的な属性を過小評価しているのではないかというものである。もうひとつは脱民族主義的《指環》解釈が今日説得力を持つのは、時代によると言うよりは、民族主義的解釈をされたのと同様、《指環》そのものに内在する要因によるのではないかというものである。この2つの仮説の適否の検証が本論の主内容で、構成は次の通りである。

序論

第1章 《指環》解釈史から見たヴァーグナー受容の変遷

第1節 ヴァーグナーの受容史の概観

第2節 《指環》解釈史の概観

第3節 《指環》解釈の系譜

本章のまとめ

第2章 《指環》のテキスト成立史とその背景

第1節 《指環》のテキスト成立史

第2節 《指環》とその周辺

本章のまとめ

第3章 《指環》の脱民族主義的解釈批判

第1節 《指環》の脱民族主義的解釈の立場と問題点

第2節 <愛の死>と<没落>という思想

第3節 <愛の死>と<救済>概念をめぐって

結論

注

参考文献一覧

第1章ではまずヴァーグナー存命中から今日に至るまでのヴァーグナー研究を様々なドキュメントを通して大局的・実証的に検討し、それを踏まえて作品《指環》の解釈史を追っている。そして1945年を転機にヴァーグナー解釈は民族主義的解釈から脱民族主義的解釈に転回した事実を確認する。また、脱民族主義的ヴァーグナー解釈は更に2つの異なる指向性をもった解釈に分かれることが判明する。本論文は一方を古典的解釈、他方を社会批判的解釈と呼んでいる。古典的解釈はヴァーグナーと彼の芸術を19世紀ヨーロッパの音楽史・文学史の本流の中に然るべき位置を与えようとする。それに対して社会批判的解釈はヴァーグナーの芸術、中でも1848年革命の気運の中で着想された《指環》を、現実批判的な作品と捉え、より良き社会を夢見たヴァーグナーのユートピア志向が生み出したものと解釈する。この社会批判的解釈に従えば、芸術はある地点で充足して古典化することは許されず、絶えず批判的に読み直されるべき存在になる。この2つの異なる脱民族主義的ヴァーグナー解釈が、ナチズムが行ったような民族主義的ヴァーグナー解釈に対立していると言うのが、第1章の結論である。

第2章は《指環》のテキスト成立史を論じている。《指環》は複雑な成立過程を経て完成したが、その各段階のテキストを慎重に比較検討し、推敲の過程でテキストから抜け落ちて行ったものと新たに入り込んで来たものを分析抽出した。そして1848年から1856年という《指環》のテキスト創作週間の中で、ヴァーグナーが「民衆」と「純粋に人間的なもの」という2つの価値観を次第に前面に押し出し、かつ、両者を無条件に肯定的に捉えていた点を指摘している。ヴァーグナーにとって、《指環》の主人公のひとりジークフリートはこの2つの概念を一身に具現する人物であるという。他方、ヴァーグナーが否定的に見るものは、「民衆」に対する「支配者」や「権力」、 「純粋に人間的なもの」に対する「国家」・「慣習」・「婚姻」、そして「私有財産」であるという。また、第1章で見た古典的、社会批判的、民族主義的の、三種の《指環》解釈が成立つのも、こうしたヴァーグナーの二元的価値観に由来するところが大きいという。つまり、《指環》は当初から古典的性格、社会批判的性格、民族主義的性格を混在させた状態で構想されていたのである。これが第1の仮説の証明ともなる第2の結論である。

第3章では脱民族主義的な《指環》解釈の問題点を提示し、問題点が生じてくる背景と、その克服の道が探られる。古典的解釈によれば、《指環》は「権力と愛の相克」という主題をめぐって展開されるドラマである。それに対して社会批判的解釈では、音楽とテキストの齟齬にこの作品のドラマトゥルギーの出発点を見ている。2つの読み方は全く異なるが、いずれも音楽重視でテキスト軽視の点では一致しているという。しかしながら、この音楽優位の作品解釈は、同時にテキスト解釈に対する限界をも示している。それは古典的解釈と社会批判的解釈のいずれもが、《ジークフリート》第3幕を境にして主張に破綻を来たしていることから明らかだ。問題なのは、元来はフォイエルバッハの「人間愛」に由来するヴァーグナーの「愛」概念の理解が、「愛の死」という別の概念と混同されていることである。さらに「愛の死」がヴァーグナー芸術の別のキーワードである「没落」という概念と結びつけられ、男女の愛の究極の成就が国家・世界の必然的な滅亡へとオーバーラップされてしまっている。本論文は、そのことが《指環》のテキスト解釈を誤った方向に導いたと考える。

「愛の死」というテーマが《指環》のドラマに入り込んで行く過程を仔細に検討すると、「愛の死」が没落と結びつくのを阻み、「愛の死」を普遍的に人間的なものへと解放する契機が存在することが分かってくる。それはジークリンデによって体現された別の愛のあり方である。本論文はジークリンデが選んだ愛の姿を「生命への愛」と呼んで、「愛の死」と峻別している。

「生命への愛」という観点から《指環》を眺めれば、《指環》が「愛の死」と対立関係にあることは明らかであ

る。この作品は「愛の死」と「生命への愛」の相克と読むことによって初めて、音楽とテキストに整合性が与えられ、脱民族主義的解釈は民族主義的解釈に対してより説得力を持つことができると考えられるというのが、第2の仮説を証明した第3章の結論であると同時に、本論文全体の結論である。

審査の結果の要旨

リヒャルト・ヴァーグナーはドイツの民族神話を楽劇の題材に使ったため、ナチス時代に政治的に利用され、民族主義芸術の代表として宣揚された。戦後はその反動もあってドイツではヴァーグナーを脱民族主義者として解釈する傾向が強い。

本論はヴァーグナーを民族主義と関連付けて解釈することの是非を、楽劇4部作《ニーベルングの指環》に限定して批判的に考察したものである。そしてヴァーグナーの発想はドイツの民族主義とも脱民族主義とも、また反民族主義とも本質的には無関係であることを証明し、人間愛的立場に立っていると結論付けた。

著者は《指環》のテキスト解釈に先立って、150年に及ぶヴァーグナー受容の歴史をつぶさに分析・分類するとともに、8年に及ぶ《指環》テキストの成立過程をも、各種の校と版を比較検討して詳細に跡付けている。この準備作業はまことに徹底的に行われ、資料や先行研究の渉獵も十分なので、論旨に安定感と説得力が生まれている。この部分だけを独立させても博論として通用すると思われる。また、その1部はすでに全国規模の学会誌「オーストリア文学」に掲載されている。

準備作業では自己の主張を控えた著者であるが、その結果を踏まえたテキスト解釈では自己の思考・主張を前面に押し出し、《指環》解釈に新局面を切り開いた。ヴァーグナー研究はともすると普遍性とドイツ性、文学性と音楽性、思想性と演劇性との二項対立から発想されがちであるが、著者は《指環》解釈に際して主人公のジークフリートではなく、妻のジークリンデに焦点を当てることで、「愛の死」と「救済」という、いわば女性原理に立ち戻った人間愛的テーマを引き出すことに成功した。もちろん、人間愛的テーマを論ずる研究者がこれまで全くなかったわけではないが、それを「愛の死」と対立させたところが、著者独自の新しい視点である。

もちろん、多少の問題・課題がないわけではない。引用に際し、一部注意の足りない箇所がある。また、《指環》以外の作品で同様の主張ができるかどうかは検証されていない。仮説の証明という、論文としての形式を貫くことに拘りすぎ、全体の論旨にややのびやかさが欠けた嫌いがある。もっとも、これらの点は本論の長所を傷つけるほどのものではない。

以上を総括して言えば、著者の主張するヴァーグナーの人間愛的立場がヴァーグナーの《指環》以外の作品にも同様に該当するかどうかは分からないが、《指環》テキストに限れば、本論が学界に新しい独自の貢献をしたことは明らかである。また、そこに見られる力量からすれば、著者の今後の発展が大いに期待できる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。